

原爆文学研究会報

第四七号

原爆文学研究会 二〇一五年五月

ヴェニスへのゲットーにて 徳永恂著『ヴェニスからアウシュビッツへ』
を読み、感銘を受けてから七年が経った今年三月、ようやくヴェニスを
訪れる機会を得た。国鉄サンタルチア駅を左手に見ながら商店街を突抜
け、小さな橋を渡って左手の路地に入った所に、目的地へと続く入り口
はひっそりと佇んでいる。'Ghetto Novissimo' という標識に見られるように、
この地域には、かつてユダヤ人ゲットーが存在していたという。第二次
大戦期、ナチスの侵攻により「ヴェニスへのゲットー」からは、人口の五分
の一が老若を問わず連行され「たという徳永の記述もさることながら、
森鷗外訳の『即興詩人』にて、「両辺の家に住める人は、おのおの六層楼
上の窓を開いて、互に手を握ることを得べく、この日光を受けざる巷は、
僅に三人の並び行くことを許すなるべし」と述べられているように、こ
の区画はどこか血なまぐさく、陰鬱でただならぬ雰囲気を醸し出して
いるのだとばかり思い込んでいた。しかし、文献からの先入観に反し、こ
の地からは何ら特異な印象は受けなかった、というのが正直な感想であ
る。ともすれば、ヴェニスのごくかの路地を一つ入れれば出くわすような
光景がその地には広がっており、ゲットー中心部にある広場のホロコー
スト祈念碑がなければ、殺戮の歴史を思わせるような不穏な空気は何も
ない。そこにあるのはただ、中世から存在していたであろう高い建物の
羅列であり、ベランダには平穩にも花が飾られ、見上げた空には白い洗
濯物が、路地には、暇そうに団欒する住民達の姿があった。予想外の光
景を目にした時、ある感情が沸き起こってきたのは、何故だろうか。

ふと、この感覚は、身に覚えのあるものだとということに気づいた。

子供の頃、長崎の爆心地付近に住んでいた。庭に洗濯物を干す母を見
つめる時、公園でラジオ体操をする時、蒲鉾屋のおばさんと話をする時、
あるいは、浦上天主堂の鐘の音を聞く時、ふと、原爆の日もこういう感
じだったのかな、などと漠然と思っていた。通学路は、途中に如己堂を
通り過ぎる以外においては、日本のどこにでもあるような風景であった
と記憶する。学校では度々、平和学習があった。その度に、もし、また
原爆が長崎の同じ場所に投下されたら、私も両親も絶対に助からないで
あらうと思うと、憂鬱な気分になった。こうした子供の心配とは裏腹に、
永遠に続くかのように思える線的な日常はそこにあつた。その日常の一
部に自分が組み込まれていることを認識する度に、不安を覚えた。何故
だろうか。一九四五年八月九日の朝が、一九四五年のある日の浦上の朝
と同じに成り得ることを、幼い私は無意識に感じていたのだろうか？

ゲットーとナガサキを時空を超えて結びつけたのは、人々の日常生活
の営みであつた。そうした営みの恒久性が保証されていないことは、歴
史を経験した私たちには明らかである。洗濯物を干す女性が突然連行さ
れ、列車に詰め込まれたのかもしれないし、蒲鉾屋の店主と客の会話は、
不自然な形で中断されたのかもしれない。人々の日常と、それを切り裂く
暴力性は常に隣り合わせなのかもしれないと考えた時、戦慄を覚えた。

(永川とも子)